

「夢」をもち、「夢」に向かって努力する生徒

原北中学校 学校通信

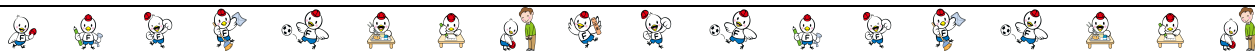


令和2年10月9日 第10号

福岡市早良区小田部7-11-1

電話 092-851-3344

発行者 校長 福崎 浩 信



避難訓練の話（詳細版）から

9月25日（金）、定期考査終了後に予定していた避難訓練は、運動場のコンディションの関係から、教室にて、放送による避難経路の確認を行い、次のような話をしました。

今回は事前に、火災を想定した避難訓練があることを伝えていました。避難経路・場所が指定されているので、自分で判断をする場面がない、迅速に避難するだけの訓練（いわゆるポディー・オン／活動ありき）の訓練でした。しかし、実際には、いろんな事が同時に複雑に絡み合っ発生し、恐怖とパニックの中で正しい判断が求められます。



平成29年7月の北部九州豪雨災害、平成28年4月の熊本地震、平成23年3月の東日本大震災など、周りで起こっている事を、決して他人事とは捉えず、自分事として捉え、自分の命、周りの人の命を守ることができるようにしておくことが重要です。

被害を最小限に防ぐためには、常日頃からの準備が必要です。日頃出来ないことは、大事なときには出来ません。有事の言動は、平事の言動にあるということです。

実際に災害が発生した時の重要な心得を3つ話しました。

1つ目は、正しい知識をもっておくことです。

消火器による初期消火の限界は、一般的には天井に火が燃え移るまでといわれていて、出火から3分以内です。このとき、燃えている部屋のドアや窓が閉められれば延焼速度が遅くなりますが、室内の温度が高温になって、室内に充満した可燃性ガスに引火して爆発的に延焼するフラッシュオーバーや、火災により室内の酸素が欠乏した状態で、ドアを開けたり、窓を割ったりすると、大量の酸素が一気に流れ込み、爆発的な炎（ほのお）を生じるバックドラフトなどの火災現象が起き、二次災害・三次災害をもたらします。初期消火ができなかったら無理をせず避難することが大事です。避難のタイミングを逃すと命に関わることにもなりかねません。

火事で恐ろしいのは、火炎より煙です。建物火災で死亡した原因を見ても、火傷より一酸化炭素中毒や窒息によるものが多くなっています。特徴的な事は、犠牲者の半数以上が65歳以上の高齢者で、5歳以下の乳幼児の死亡が多い点も見逃せません。

煙のスピードは、横方向に毎秒50センチ～1メートル（歩く速さ）、縦方向には毎秒3～5メートル（かけ足の速さ）といわれています。もちろん、建造物の材質や火災現場の状況に左右されるのでそれ以上にもなります。

生きて働く知識を元に、消火活動が困難だと判断したら、速やかな避難が大切です。

2つ目は、情報を正確に収集する力です。

どんなときも、確かな情報を素早くキャッチすることが大切です。

情報はつかもうとしない人には入ってきません。つかもうとしない人に限って、すぐに聞いていない、知らなかったと言うように思います。周りが言う前に自分で情報をつかもうとする人は、何かとうまくいくことが多いように思います。

3つ目は、正しく判断し、対応力する力です。情報を正しく整理し、判断をするためには、日頃から身の回りの物をきちんと整理しておくことや、考え方を整理しておくことが大切です。避難の妨げにならないように身の回りを整理整頓しておくこと、持ち出す物をわかりやすくまとめておくことが大切です。

身の回りが煩雑であれば、正しい避難ができず、二次災害が起こることもあります。

また、「こんな場合はこうしよう」「こうしたらこうなる」など、ある程度のQ&Aのようなものをもっておくことも必要です。

常に危機意識をもつとともに、常日頃の生活の中で、主体的かつ正確に情報を収集する力を磨き、積み上げた情報の中から正しく判断する習慣をつけて下さい。

今日の訓練を機に、未曾有の被害をもたらす突然の災害に対する理解を深めると共に、理解していること・出来ることをどう使うか、有事をイメージし、冷静な対応で、自分の命、周りの命が守れるようにしておくことを望みます。

道は開ける(成せばなる) 「即決する(今日の一針明日の十針)」・・・豊臣秀吉

秀吉が柴田勝家と戦った、いわゆる賤ヶ岳(しずがたけ)の合戦の際、柴田側の大將佐久間盛政は、秀吉が大垣に出兵している留守について、秀吉側の砦を奇襲してこれを落とし、大きな戦果をあげました。ところが、その報に接した秀吉は、直ちに判断し、全軍を急がせ、50kmあまりの道をわずか半日ほどで引き返したのです。そして、秀吉の帰陣のあまりの早さにあわてる佐久間勢を追撃し、勢いに乗って一気に勝家の本陣をも攻め落として決定的な勝利を博しました。

こうした秀吉の機敏さは、例えば明智光秀を倒し、主君信長の仇を討った山崎の合戦にも見られます。本能寺の変が6月2日で、山崎の合戦は6月13日、その間わずか11日しかたっていません。しかも秀吉はその時、岡山で強敵毛利の大群と四つに組んで対峙していました。新幹線ができ、通信機器やAIの進展が著しい今日ならともかく、全て徒歩であった時代に、これは大変な早さだったと言えます。事実、相手の光秀はもちろん、信長の家人や同盟の家康に至るまで、誰一人こうした秀吉の素早い行動を予想できなかったと言われています。

こうした他人の予想を超えるような機敏さ、言い換えれば決断と行動の早さというものが、秀吉をして数々の大事な合戦を勝利に収め、天下をとらしめた一つの大きな要因と言われています。一瞬の勝機を的確につかむかどうかに勝敗の帰趨がかかっている場合もあります。そういう時にいたずらに躊躇逡巡していたのでは機会は永遠に去ってしまいます。今日であれば一針で済むほころびも、明日になれば十針必要なほころびへ大きくなることもあります。熟慮に熟慮を重ね、他人の意見を聞いた上で決断実行する場合と、即断即行をする場合の2つを心がけておくことが大事と言えます。